

当院のダウン症児の粗大運動獲得の平均月齢について

～独歩獲得の平均月齢に着目して～

かがわ総合リハビリテーション病院 リハビリテーション部 理学療法士 藤川 貴教

キーワード：ダウン症児、粗大運動、抗重力活動

要 旨

一般的に、ダウン症児は、健常児の粗大運動獲得時期の平均月齢と比べ2倍ほどの期間を要するとされている¹⁾。また、独歩獲得までの平均月齢は30.1ヵ月とされている²⁾。

今回は、当院に通われている過去10年間のダウン症児の各粗大運動獲得までの平均月齢を調査した結果、独歩において34.9ヵ月を要した。また、独歩獲得平均月齢より早い群、遅い群、未獲得群で各粗大運動獲得時期の差を調査した結果、寝返り獲得までは差が認められなかったが、座位獲得の月齢差は、早い群-遅い群7.7ヶ月、早い群-未獲得群14.9ヵ月の差が認められた。このことから、早期から座位のような持続的な抗重力活動を介入することで、座位以降の運動発達の遅れを少なくし、獲得可能な粗大運動の月齢を早める可能性があると考えられた。

1. はじめに

ダウン症児（以下DS児）は、健常児の粗大運動獲得時期の平均月齢と比べ2倍ほどの期間を要し独歩獲得までの平均月齢は30.1ヵ月とされている。今回は、当院に通われている過去10年間のDS児の各粗大運動獲得までの平均月齢を調査する。そして、独歩獲得平均月齢より早い群、遅い群、未獲得群で各粗大運動獲得時期の差を調査し考察したので以下に報告する。

2. 対象

当院で外来理学療法を処方された、または現在も処方されている過去10年間(2012年1月～2021年12月)のDS児74名とした。粗大運動獲得時期が不明な部分に関しては、データ算出から除外している。

3. 倫理的配慮

かがわ総合リハビリテーションセンター倫理委員会で承認を得た。又、対象患者様に研究の目的を説明し了承を得た。

4. 方法

はじめに、当院の対象患者74名の紙カルテ、実施計画書、リハ記録を確認し、定頸、寝返り、座位、ずり這い、四つ這い、つかまり立ち、つたい歩き、立位（支持物なし）、独歩の粗大運動の平均獲得月齢を調査した。

次に、当院と文献のDS児の粗大運動の平均獲得月齢を比較した（文献の結果に合わせ、定頸、寝返

り、座位、四つ這い、独歩の5項目）。また、当院のDS児を文献の独歩獲得平均月齢30.1ヵ月よりも早い群、遅い群、未獲得群（DS児の独歩獲得時期最大範囲96ヵ月を超えても獲得できていない）の3つのグループに分け、粗大運動獲得時期を比較した。

更に、当院に現在通われているDS児のリハビリ担当者にアンケートを行った。アンケート内容は、人や物への興味、人や物へ興味を示したときの様子、ご家族のリハビリのときの様子の3項目であり、0～10段階評価を主観的に行った（図1）。そして、当院に現在通われているDS児を文献の独歩獲得平均月齢よりも、早い群、遅い群、未獲得群の3つのグループに分け比較を行った。

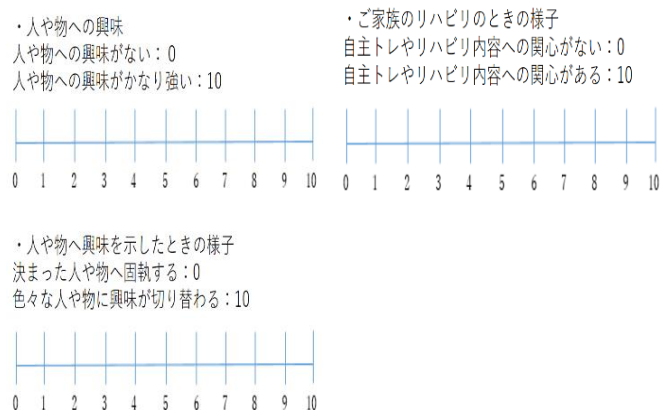


図1：リハビリ担当者へのアンケート内容

5. 結果

始めに、DS児の粗大運動の平均獲得月齢の結果である(図2)。当院では、定額5.5ヵ月、寝返り6.5ヵ月、座位16.2ヵ月、四つ這い22.4ヵ月、独歩34.9ヵ月であった。定額、寝返りに関しては、文献の獲得月齢とほぼ同じであったが、座位以降は月齢差が少しずつ認められ、独歩では4.8ヵ月の差が認められた。

次に、当院のDS児で、文献の独歩獲得平均月齢よりも早い群、遅い群、未獲得群の比較の結果である(図3)。寝返りでは、早い群-遅い群1.6ヵ月、早い群-未獲得群1.5ヵ月の差が認められた。しかし、座位では、早い群-遅い群7.7ヵ月、早い群-未獲得群14.9ヵ月の差があり、寝返りよりも月齢差が大きく認められた。それ以降も、月齢差は早い群-遅い群で6.2~18.1ヵ月、早い群-未獲得群で9.7~22.7ヵ月の月齢差が認められた。

最後に、アンケートで調査した、当院に現在通われているDS児の人や物への興味、人や物へ興味を示したときの様子、ご家族のリハビリのときの様子の比較の結果である(図4)。人や物への興味は、早い群、遅い群ともに未獲得群よりも高い値を示した。また、人や物へ興味を示したときの様子も同様に、早い群、遅い群ともに未獲得群よりも高い値を示した。ご家族のリハビリのときの様子は、早い群、遅い群が未獲得群よりも若干高い値を示したが、3群ともに大きな差は認められなかった。

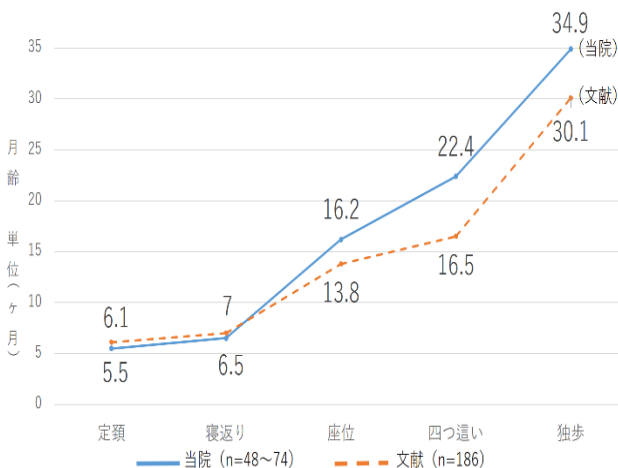


図2: DS児の粗大運動の平均獲得月齢

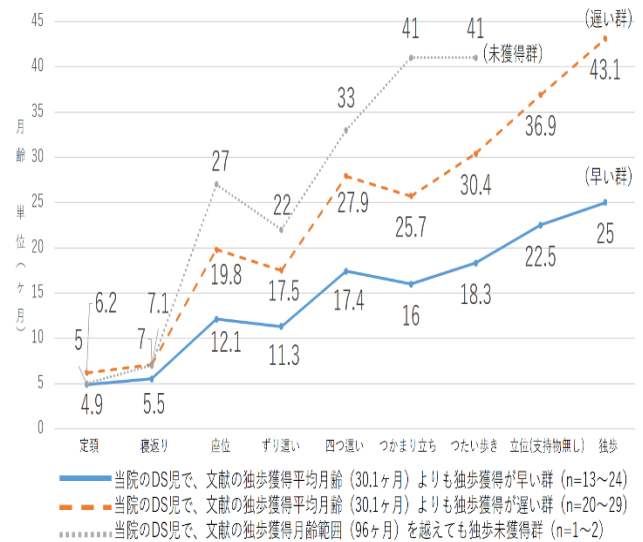


図3: 独歩獲得月齢の平均よりも早い群、遅い群、未獲得群の比較

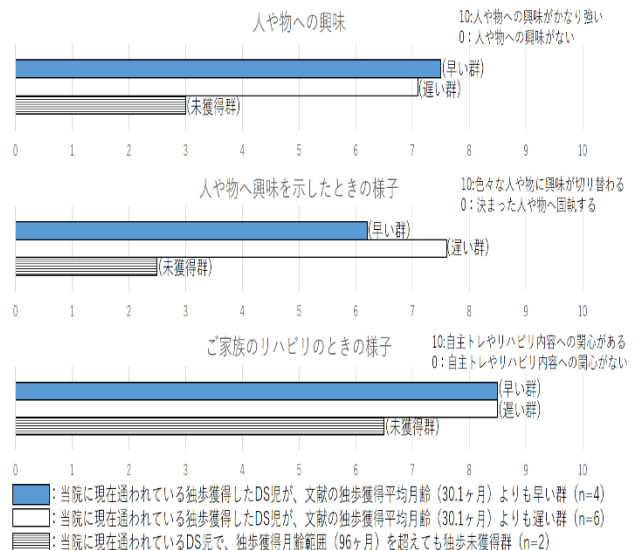


図4: 人や物への興味、人や物へ興味を示したときの様子、ご家族のリハビリのときの様子の比較

6. 考察

当院のDS児で、文献のDS児の独歩獲得平均月齢30.1ヵ月よりも早い群、遅い群、未獲得群で比較を行った結果、寝返り獲得の月齢差は、早い群-遅い群1.6ヵ月、早い群-未獲得群1.5ヵ月であった。しかし、座位獲得の月齢差は、早い群-遅い群7.7ヵ月、早い群-未獲得群14.9ヵ月であった。このことから、座位のような持続的な抗重力姿勢を、早期から介入してもいいのではないかと考えた。なぜなら、DS児は、一般的に全身の低緊張を有する疾患であり、そのため、早期から持続的な抗重力活動を促すことで、座位以降の運動発達の遅れを少なくし、独歩獲得時期を早める可能性があると考えられた。しかし、未獲得群では、他の要因も

あり独歩獲得までに至らないと考えられるが、獲得可能な粗大運動の月齢を早める可能性はあると考えた。

また、アンケート調査の結果から、早い群と遅い群は、人や物への興味が比較的強く、興味の切り替えも多かった。それに対し未獲得群は、人や物への興味が少なく、また興味を持ったとしても固執する傾向があった。このことから、DS児の独歩獲得には、人や物への興味が比較的強く、興味の切り替えも可能であることが1つの要因として考えられた。結果的に自発的に動く場面が増え、粗大運動獲得に少なからず効果があると考えた。また、早期から自発的に興味を持ったり、興味の幅を広げてあげる支援や他職種との連携が必要だと考えられた。

7. おわりに

最後に当研究の実施にあたり、ご協力頂いた患者様、当センタースタッフに深く感謝いたします。

【出典先】

令和3年度かがわ総合リハビリテーションセンター
研究年報

【引用文献】

1) 諏訪まゆみ：ダウン症のすべて 改訂第2版. 中外医学社, 東京, 2021;pp33

2) 多和田 忍：ダウン症と運動発達. J
Clinical Rehabilitation.2011;20:pp53

【参考文献】

3) 斎藤和代：Down 症児の早期療育とシャフリングベビーの検討. 脳と発達, 2016;48:pp46-50